

読売俳壇

矢島 渚男 選

爽やかな笑顔は次の笑顔へと

土浦市 今泉 準一

【評】なんと上手に今の私の心境を代弁してくれているのかと感心した。選者の引き継ぎが出来て嬉しいときにピッタリ。津川給理子さんのことは殆ど知らずに句集『夜の水平線』で選びました。

穴を前に蛇動かずにゐたりけり

千葉市 笹沼 郁夫

【評】寒くもなってきたし、さてどうしようかと思案中の蛇君。冬眠とは深い知恵だ。

秋寒し悲しきクマのぬいぐるみ

東京都 山田真理子

【評】この年の熊君。縫いぐるみさえ切ない。同じクマでもパンダとは大違い。人間の都合で自然のバランスを壊すのはどうだろう。

風の道こよと庭の落葉かな

福島市 高橋 雄三

詠めばまた自虐の句なりうそ寒し

栃木県 あらあひとし

秋さびし母が抱く弟も遺影の中

川崎市 伊藤 康昭

どんぶりに芋薯蕷やめった汁

平塚市 原 道雄

投網打つ舟にすぎなき秋の雨

出雲市 石原 清司

子ども部屋今は物置き小鳥来る

横浜市 宮川 ゆず

ブライダル相談外は秋の雨

会津若松市 安藤 和繁

高野ムツオ 選

稲木解くことも一人や赤とんぼ

松江市 三方 元

【評】天日干しを終え、一人稲掛けを解く。仕舞いの作業にこそしむ眼裏に浮かぶのは大家族だった日々の賑わいと農業の行く末。肩にやってきた赤とんぼが寂しさを深める。新米の今は二人やかみしめる

御殿場市 内田 秀子

【評】父母を見送った。子供たちは独立した。夫婦二人となったのは一区切りだが、やはり寂しい。新米が言ければ言いほど寂しいのだ。

被爆樹の落葉を流す被爆川

対馬市 神宮 斉之

【評】長崎の被爆樹木といえは太樟だが、柿の木も知られる。被爆した川を流れるのは柿落葉がふさわしいか。澄んだ青空も共に流れる。さらさらと金木犀の香かな

新しき落葉や大き音たてて

東大阪市 木田 博幸

縄を縛ふことより習ひ冬構

三原市 天崎 千寿

電柱と電柱の間月真澄

泉佐野市 布野 寿

落ち葉掃く乾きし音も寄せて掃く

宝塚市 広田 祝世

一岩にこころの川音秋深し

香芝市 河野 嘉雄

雁来よ来よ櫓田に水入れて待つ

東京都 望月 清彦

津市 中山 道春

正木ゆう子 選

一日を空っぽにして鷹見上ぐ

水戸市 加藤木よういち

【評】他の用事を一切入れずに、鷹を観察する日。それとも偶々鷹を見つけたから、ふと雑事から心が離れたのか。たまには一日を空っぽにしてみたい。そんな日が一番贅沢。夜長猫叱られたくて掻く柱

大阪市 今井 文雄

【評】いけないとわかっていて爪を研ぐ。こらっと叱ると、嬉しそうに逃げ出す。猫あるある。できれば追いかけて欲しいのだ。夜は長い。ひとつだけハロウィンのもの飾りけり

東京都 大岩 真理

【評】ハロウィンもしいに馴染み、時期には可愛いグッズが店頭を飾る。「ひとつだけ」にイベントとの微妙な距離感が表れて微笑ましい。虫ごちをほほ囁ませて夜雨かな

東大和市 板坂 寿一

人魂を共に見し友逝きて秋

神奈川県 中島やさか

早歩き見す鶴鶴よそこ車道

行橋市 野田 文子

瀬戸内海歩いて渡る天高し

川崎市 多田 敬

大潮の干潟に鴉鰂を突く

東京都 前田 亨静

校歌にもありしかの川秋出水

武蔵野市 大谷由美子

冬ソナノ頃思ひ出す黄路落

横浜市 古田 亨

小澤 實 選

風呂の炬に薪焚べる母星月夜

京都市 姥目樫

【評】星月夜は月の出ていない秋の夜に星が月のように明るいことを言う。その星々の中心に薪を焚べている母がいるというのだ。「風呂の炬に」という表現もたしかだ。

秋の夜やかき揚げ井を分け合へる

東京都 森 彰一郎

【評】秋の夜、ひとつしかない「かき揚げ井」を友と分かち合って食べた。それぞれに分かれてはいない、この井が友との親しさをものごたる。ずりずりと綱ごと引かれ運動会

下田市 森本 幸平

【評】運動会の綱引きであるが、もはや敗色が濃いうた。「ずりずり」という擬音語に実感あり。靴が引きずられて、音を立てている。ベビーカーの魔女を押す魔女ハロウィーン

茨城県 杉山 満

レシートを葉代わりや秋の夜

東海市 中山あゆみ

てのひらに台詞びつり村芝居

東京都 岩崎 美範

文末に（笑）のメール小春なり

横浜市 鈴木 基之

具沢山のサンドイッチや粧ふ山

狭山市 小俣 敦美

映画観る田中小実昌毛糸唱

川口市 高橋まさお

キャラバンや駱駝の黒き眼に銀河

仙台市 相島 都志

枝しおり 折

永井祐記「歌よみに与ふる書」

正岡子規が手がけた批評の名著を注目の歌人が現代語訳した。「歌よみに与ふる書」に対する読者からの質問に子規が答えた「あきまつに答ふ」「人々に答ふ」も訳して収録。著者による解説も加えた格好の入門書。

（左右社、2420円）

梅崎実奈編『鴉は硝子のフリルで踊る』短歌通の書店員である著者によるアンソロジー。幻想をテーマに編んだ147首が並ぶ。へわしたかったか、天より細く垂れきたる紐を最後に引つづいたのは、石川美南（河出書房新社、2530円）

◆第40回俳壇賞馬場公江「ゆらゆら」（30句）

◆第37回歌壇賞霧島茉莉「柔らかい襟」（30首）

◆第2回定家賞川野芽生「星の嵌め殺し」（河出書房新社）

◆第51回現代歌人集会賞上川涼子「水と自由」（現代短歌社）



題字デザイン・イラスト 福田美蘭